



小磯良平 「婦人座像」 エッチング 258×294

(1963)

目次

小磯先生のエッチング	2
「明倫堂」と「経武館」	4
志賀潔博士と揮毫	6
白糸威六枚胸具足	6
水谷清作「闘牛」	7
資料館からのお知らせ	8

金沢大学資料館

〒920-11 金沢市角間町  
TEL : 0762 (64) 5215

## 小磯先生のエッチング

今井治男

金沢大学教育学部教授

新春一月、資料館展示室において「資料館収蔵資料と現代版画展」を開催する予定で準備を進めている。収蔵資料に加えて陳列する版画作品は、福沢一郎、山口 薫、猪熊弦一郎、脇田和といった洋画界重鎮のリトグラフ試刷り、そして私の恩師小磯良平先生のエッチングも数点陳列したいと考えている。私的なことながら先生の制作の場に立ち会った思い出も深いからである。

小磯先生といえば大正末期、東京美術学校開校以来の秀才といわれ、在学中、帝展特選という華やかなエピソードを出発点に、油絵において卓越した描写力と、気品の高い典雅な画風で活躍されていたことや、昭和58年には文化勲章を受章されたことは人々の記憶にまだ新しいであろう。更にさかのぼって先生の足跡をたどれば昭和16年の朝日文化賞、17年の第一回芸術院賞、そして30年第三回現代日本美術展大衆賞と受賞をかさねておられ、神戸銀行本店の壁画「働く人々」、迎賓館赤坂離宮の壁画「音楽」「絵画」など大作の傑作も残されている。

しかし、先生は油絵だけでなく版画にも若い頃から親しまれ、なかでもエッチングについては総数百点をはるかに超す制作があることを知る人は少ないのではなからうか。

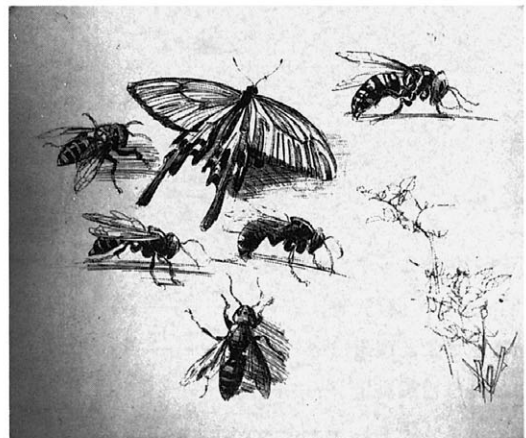
昭和の初年といえば版画に対する認識はまだ極めて低く、版画は「半画」と蔑視されていたそうであり、学校教育でも版画は手工の一部として年賀状制作程度にしか扱われなかったような、その時代からすでに版画に価値を見出され愛着をもたれていたことになる。昭和42年発行の雑誌『アトリエ』に先生の書かれた次の回想文がある。

「私が版画をてがけたということになると40年近くにさかのぼる。石版をやったのが手はじめである。それからしばらくしてエッチングもやってみた。しかしそれに打ち込むというほどでなく、中途半端なものであった。ただ歴史が長いというだけのことである。知人の印刷工場をのぞきにゆくことに興味を覚えてのことであ

る。それが動機であった。誰にも教わらないで勝手にやっていたので、面白さがいま一つということで技法の知識もないままに終わった。学校の版画教室をのぞくようになって、初めて種々の設備が版画の技術と結びつく様子を理解することが出来た、というしだいである。」

この控え目な文章と異なり、その頃のアメリカ巡回日本現代版画展に日本代表メンバーの一人としてすでに名を連ねておられた。そこが先生らしい謙虚さといえようか。昭和8年に発表されたリトグラフ（石版）が先生にとって最初の版画制作であるが、以後エッチングに興味をもたれたようで、アトリエにエッチングプレス機を置き、小野忠重先生に手ほどきを受けられたこともあったらしい。

しかし何と言っても、本格的にエッチング制作を始められるようになったのは、昭和28年東京芸術大学油絵科教授に着任されてからであろう。大学には版画教室がありエッチングやリトグラフの設備を整えていた。（しかし、まだ活動自体細々としていたこの教室の体制を整え、一層充実させるよう提案されたのも小磯先生である。）先生は油絵指導の合間にしばしば版画研究室に足を運ばれ、エッチングの試作を繰り返されていた。自分で版を削ったり磨いたりされることはなかったが、若い人に準備させた銅版に



小磯良平「蝶と蜂」エッチング 210×181 (1963)

素早い線で人物像などよく描かれた。

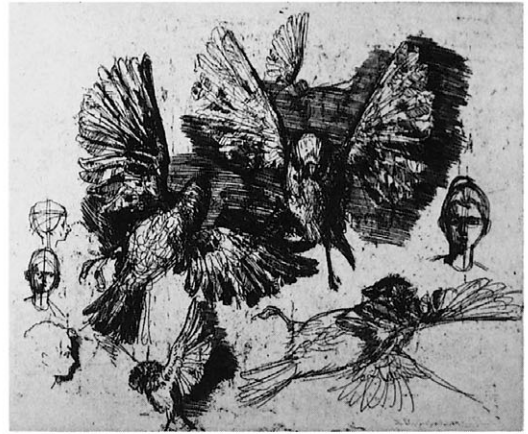
エッチング、即ち腐食銅版画は銅の板に鉄針で線を描き、酸で腐食して凹部を作り、その凹部にインクをつめて紙に刷るのであるが、この線の効果には深遠な不思議な魅力があり、そしてまた、過ぎた時代への郷愁を誘うような美しさがある。線の素描が好まれた先生はこの魅力にひたろうとされたのであろう。

試作された男子裸像から、馬などを組み合わせた構図研究的群像などの数々の作品には、古画の美しさを現代の器に入れて再現させた感があり非常に興味深い。また先生はルーレットやベルソーといった点刻の用具も工夫して使われていた。

このような試作を経て本格的な制作にはいられた昭和38年頃は、私も版画研究室助手として勤務を始めた時期であったから、版の準備や製版、刷りと手伝わさせていただき、若い頃の懐かしい思い出としている。

腐食に使う硝酸は生き物である。その濃度は勿論のこと、気温、使用頻度、版のニスの濃淡、筆圧によって、そして全く理解できない理由によっても腐食の進行が異なるのであるから、大先生の作品の腐食は全く冷や汗ものであった。自分の作品なら多少の計画ずれば、それなりに手を加え工夫していくのであるが、あずかった作品は、間違えてはならぬという緊張がいつぱいだからである。後年、「小磯良平銅版画集」をまとめられた益田氏にこのことを告げたら、その初々しさがかえって作品を魅力的にしているとうれしいことを云ってくれた。

実際に失敗したこともあった。七月の暑い日、銅版でなく、亜鉛版に描かれた作品を硝酸の中に入れて、凄い勢いで腐食を始め版の周囲のニスまではがれてきたことがあった。穏やかな先生は何も云われなかったが、内心はどうであったか。刷り上げた結果は、版の周囲に数カ所ボンヤリした、しかし除去しようのない汚れが見える。あえて弁解すれば、絵の空間が把握できていれば汚れもそれなりに生きてくるもので、



小磯良平「すずめ」エッチング 252×300 (1963)

エッチング独自の面白い効果が偶然とはいえできたと言えなくもないと一。丁度一部の小説家が、写真植字全盛の今日、あえて鉛の活字印刷の力強さを好み、活字の一部が摩滅欠損していることにも風趣を感じないようにである。この作品は、先の銅版画集にも載せられているところをみると編集氏はこの汚れの美を認められたのかも知れないとその後少し安心もしたりした。

しかし、先生は放埒な人ではない。正面から事にあたる技術を重んじる人であった。情緒に流されることを好まなかった。感情を理性で統御した構成力、描写力に優れた画家であった。アングルの知的精緻さやドガの的確な構成力を吸収され、それを足場にして清潔で気品の高い小磯芸術を築いておられた。

大概のエッチング作家は強弱の線を幾重にもかさねるため、腐食を何度も繰り返すが、先生の場合は一気に線描し、腐食は常に一度きりであった。一気に線描で形を鋭く把握する新鮮さを好まれ、すでに凹部となった線の上に再び線を重ねて版づくりする工芸的ともいえる手法には興味を示されなかった。それはメゾチントという黒い地を磨きだしていく技法の場合でも同様で、非常に微妙な階調を確認しながら描き進めなければならないにもかかわらず、試刷りを繰り返すことなく、一回で成功させてしまわれ

## 収蔵資料紹介

### 「明倫堂」と「経武館」

— 加賀藩の文武学校 —

る。この妙技は描写力のなせる技であろうか。

それにしても、これらの作品に見られる堂々として、且つ温かみのある存在感はどのような理由によるものだろうか。版画史家であり木版画家であった小野忠重先生はよく「君達は小磯先生の本当の良さを理解していない」と我々に苦言を呈された。つまるところ、人間存在の尊厳、そして人間愛が中核にあることを見逃していないか、ということであつたらう。

小磯先生はモーツァルトの音楽を好まれた。そして一方、学生達との酒席ではよくロシア民謡を所望された。ロシア民謡を聞くと涙が出ることも云われたことがある。しかし、こんな酒席で御自身が歌われるのはいつも賛美歌であった。先生の親友である詩人竹中 郁氏は述べている。

「気品を支えているのは或種の哀愁である。この哀愁の底には、少年時代には生母から、長じては養母からそそがれたキリスト教思想がしみこんでいて、その人間愛がもたらす哀愁と言えそうである。」と。これは先生の全作品についていえることであると思う。

昭和63年85才で他界された。飾りのない簡素な教会での葬儀。先生のお顔と共にいつも思い出されるのは、部屋をたばこの煙でもうもうとさせて「すずめ」制作に熱中されていた姿である。

(資料館長)

前館長貞末先生の転出にともない、平成4年4月より後を引き継ぐことになりました。本稿をもって挨拶にかえさせていただきます。



\*「資料館収蔵資料と現代版画展」は、平成5年1月18日(月)より29日(金)まで資料館展示室で開催の予定です。



上：明倫堂 下：経武館

加賀藩において家臣団の統制を制度化し、「改作法」の完成による土地・租税制度の確立の後に、五代藩主綱紀が登場する。綱紀は学問に造詣が深く、木下順庵、室鳩巢ら多くの著名な学者、文人を加賀藩に招くとともに膨大な数の図書を集め、以後の加賀藩の文化の基礎を築いた。また、綱紀は元禄4年(1691)の「大願十事」に学校造営の意を示したが、実現には至らなかった。

100年後の寛政3年(1791)、十一代藩主治脩は学校造営に着手し、翌寛政4年(1792)3月、初代学頭新井白蛾を招き明倫堂が開校された。

明倫堂の師範には、広く藩臣及び陪臣の中から人材が求められ、白蛾の子新井升平をはじめ、陪臣等がこれにあたった。なお、寛政4年の下達に「四民教導」がうたわれているが、実際には藩臣とその子弟が教育の対象であった。

明倫堂の学科としては、寛政2年の松平定信の「寛政異学の禁」を受けて朱子学が中心であったが、そのほかに和学・漢文・漢医学・算術・筆道・習礼・歴史・天文・暦学・詩文・法律・本草学が挙げられていた。寛政4年の明倫堂定書の第1条では五倫の道徳を示し、第4条では「講習は聖經賢伝を本とし諸賢儒正説をも兼読